

## 幻の茶入『種子茄子』について

西之表市文化財保護審議委員 中園 愛

### 1 『種子島家譜』の一文より

「寛永六年（1629）己巳、家老平山内膳友嘉を以て茶入（茄子と号す）を家久公江府に献ず」←種子島家 17 代当主・忠時の時代（『種子島家譜』巻五）



この茶入は能野焼では？という疑問から探索スタート！



調べてみたところ、『種子茄子』と称される、種子島家から島津家に献上された茶入が存在したことが判明。ただし、漢作唐物ということで能野焼ではなく、残念。。

【そもそも茶入とは？】抹茶を入れる器の総称であるが、一般的には濃茶用の抹茶を入れる陶製の茶器の総名。通常は象牙の蓋と、金襴(きんらん)、緞子(どんす)、間道(かんどう)などの古裂(こぎれ)でできた仕服(しふく)といわれる袋が添えられ、塗り物等の容器でつくった挽家に納められ、さらに箱に入れて保管するようになっている。大きさとしては、だいたい 4.5 cm から 12.3 cm ほどの高さ、5 cm から 7 cm ほどの胴径をもつのが普通である。形の種類として、肩衝、文琳、茄子、大海、丸壺などがある。産地によって唐物（中国産）、和物（日本産）、島物（東南アジア産）に分けられるが、とりわけ唐物がもっとも珍重されてきた。

### 2 高橋義雄（1921）『大正名器鑑』で発見した『種子茄子』

雑記

種子茄子御茶入 一個

右種子島彈正祖父種子島左近家に被持傳候處、中納言様御代被召上藤重藤巖と申者へ御見せ被成候處、天下之名物つくもと申候なすびの茶入に少も不相替天下に三ツ候と、昔より申習候内、二つは太閤様に御座候て、大阪にて秀頼果候時、焼候ものと少も不相違此方の茶入は一段見事に候、其時藤巖賣申候共、五百枚にて賣可申候と申候由、家久公御譜中、島津下野久元、伊勢兵部貞昌書狀相見得申候、右御茶入の御禮彼此に、種子島へ有之候御藏入四千石餘、左近に被致拜領候由、是又家久公御譜に相見得申候。

（島津公爵家文書）

○太閤秀吉が所有していた天下の名物「つくも」(注1)にも引けを取らない逸品である。

○『種子茄子』の代わりに、種子島家へ公領四千石を拝領する。

（1633 年）種子島に在る所の公領四千石を返し賜ふ。西村越前時昌を使として江府に到り之を謝し奉らしむ。仍って九月廿七日、下野守久元、伊勢貞昌、書を贈る。下に記す。（慶長末年（1615 年）、検地の時、家老種子島六郎右エ門、野間虎兵エ、平山休兵エ、心慮を失するを以て、四千石を増して公領と為す。地力に<sup>たびたび</sup>応ぜざるを以て<sup>たびたび</sup>之を訴ふ。故に此に及ぶ。）

（『種子島家譜』巻五）

○『種子島家譜』では、「公領四千石を返していただいた」というだけで、「『種子茄子』の代わりに」という記述は無い。

◎『茶道』（1937）の中での記述には「（前略）名物「種子茄子」茶入は、文政八年（←誤り）島津家久が知行四千石を以て種子ヶ島左近と交換したものであることは周知のことである。」とあるので、茶人の間では有名な話であるのかもしれない。

### 3 『種子茄子』の詳細（『大正名器鑑』より）

高さ 二寸二分（約 6.7 cm） 胴径 二寸三分（約 7 cm）  
口径 八分（約 2.4 cm） 底径 九分（約 2.7 cm）～一寸（約 3 cm）  
甕高 一分五厘（約 0.5 cm） 重量 十九匁五分（約 73.1 g）

・挽家は黒塗で、島津齊宣筆による「茄子」の金字の書付あり。

（挽家：茶入を入れる木の器のこと）

口作丸く拵り返し浅く、胴に沈筋一線繞り、裾以下鍍氣色土を見せ、底糸切稍荒く、底近くに一篋繞る。底面にヒツキ及び指頭形あり、其中央に小さき土ホツレあり、總體天目釉の如き浅黄味を含みたる黒飴色にて、胴紐上より釉ナダレ裾に至りて止まり、露先に蛇蝸色あり。又之れと相並びたる同一ナダレの露先にも、同色を現はせり。火中に入りたりと覺しくて、釉カセあり。又總體大破を漆にて補ひたるが爲め、原釉色を失ひたる所あれども、胴以下は總て原質を存して、蛇蝸色の景色頗る面白き處あり。内部口縁釉掛り、以下轆轤目立たず、僅に筋を成すのみ。（大正名器鑑）

◎明治 10 年西南戦争の折に、火を受けたと言われている。

◎破損（『大正名器鑑』では「大破」と表記）したものを漆で修復してある。

### 4 大名物『付藻茄子』と見比べよう

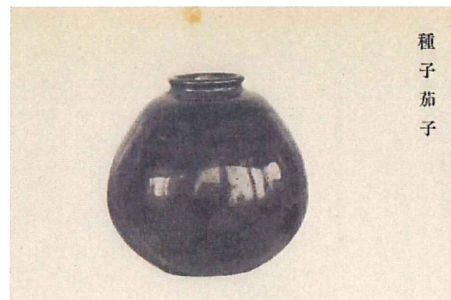
・『大正名器鑑』に「島津公爵家文書」からの引用として記載してあった「雑記」について、その原典を確認すると、『大正名器鑑』では省略されていたエピソードが！

（前略）大阪にて秀頼御果候時焼候を、相國様より藤巖へ被成御預、當時手前に御座候由、則其茶入召寄、於中納言様御前種子嶋より之茶入と 被見合候得て、形比少も不相違候、勿論つくもは焼候つる故、わろく候てくすり之分少も不見得候、此方のお茶入は一段見事に候付、殊之外褒美被申候、（後略）

◎藤巖（注2）が秀忠公より「つくも茄子」を賜り手元に持っていたので、秀忠公の御前で家久の持参した「種子茄子」と見比べてみたところ、形が良く似ていて、むしろ（大阪夏の陣で）焼けてしまった「つくも茄子」よりも一段上であると評されている。



大名物 唐物茄子茶入  
付藻茄子（12～13世紀）  
【静嘉堂文庫美術館 HP より】



唐物茶入 種子茄子  
【『大正名器鑑』より】

## 5 なぜ、島津家へ『種子茄子』を贈ったのか？

◎17代当主・忠時が生まれる前年、16代当主・久時は没している。

→幼くして種子島家の当主になった忠時を、当時の島津家当主家久は、特に目を掛けていたようである。

『種子島家譜』の記述より・・・

○島津家の家臣を種子島に遣わし、「鶴袈裟（忠時の幼名）が幼なるを以て、君臣の礼を乱り、私曲を懐き、事を怠る事勿れ」と命じている。

○忠時元服の際は、家久公自ら冠を被せ、「武蔵守忠時」と書して名付けている。

○将軍家光・前将軍秀忠に謁見する際に、忠時を同席させている（『種子茄子』を献上した翌年）。←この際に『種子茄子』を秀忠らに見せたと考えられる。「将軍（家光）白銀百枚を忠時に賜ふ。」

○家久の四女を、忠時に嫁がせている。嫁がせた後も、事あるごとに二人に贈り物をしている。



とにかく家久公は、忠時の事がお気に入りだった様子がひしひしと伝わってくる。

→これに対し、忠時も「家久公に鉄砲百挺（玉目五匁）を献ず」など、事あるごとに贈り物をしている。『種子茄子』もその一つ。

・・・想像力を豊かにするならば、父のなかった忠時は、家久公のことを父のように慕っていたのではないか。

→家久公と忠時との、良好な関係故の贈り物だったのでは。

## 6 現在『種子茄子』はどこへ？

◎『大正名器鑑』が発刊された時点では、公爵 島津忠重氏 蔵。

島津忠重氏：島津家30代当主。大正13年（1924）博物館「尚古集成館」を開館。

昭和2年（1927）昭和金融危機により十五銀行が破綻すると、筆頭株主であった島津家はその煽りで大損害を負った。その後、昭和3年と4年の2回に渡って、先祖伝来の家宝を東京美術倶楽部で入札にかけている。



第1回（昭和3年）の入札目録の中に『唐物種子茄子茶入』を発見。

その結果が記された「公爵島津家蔵品落札高値表」によると、『種子茄子』の落札価格は「金千百八十九圓」。

⇒現在の価格に直すと、安く見積もって、およそ**90万円**。

◎残念ながら高値表に落札先の記載はなく、追跡もここまで……。無念！！

戦争や震災などを乗り越えて、

今もどこかでひっそりと受け継がれていることを願います。

### 【注記】

(注1)：付藻（つくも）は、「九十九髪」「付喪」「作物」とも表される。足利義満からの伝来を誇るこの茶入は、戦国武将・松永久秀が信長に献上して大和一国を安堵されたエピソードを持つ。大坂夏の陣で罹災したが、大坂城址から徳川家康の命をうけた藤重藤元・藤巖父子により探し出され、漆で繕われ、精緻な漆繕いの褒美として、家康から藤元に下賜された。

(注2)：藤巖＝藤重藤巖。戦国時代末～江戸時代初期の奈良の塗師。1615年大阪城落城の際に、徳川家康の命により父・藤元と共に宝蔵跡から掘り出した茶器の修復を命じられる。修復の出来がよかったため、九十九髪茄子は藤元に、松本茄子は藤巖に下賜された。

### 【参考文献・サイト】

- ・『種子島家譜』巻五
- ・高橋義雄（1921）『大正名器鑑』第1編 大正名器鑑編集所
- ・『鹿児島県史料 旧記雑録追録』3 （1973）鹿児島県維新史料編さん所
- ・『公爵島津家蔵品入札目録』（1928）東京美術倶楽部
- ・『公爵島津家蔵品落札高値表』（1928）東京美術倶楽部
- ・林匡（2015）「薩摩藩家老の系譜」『黎明館調査研究報告』第27集  
P1 - 43 県歴史資料センター黎明館
- ・静嘉堂文庫美術館ホームページ（名物「つくも」について）
- ・前田幾千代（1937）「薩摩焼」『茶道 器物編（四）巻の十五』創元社

種子茄子（たねなす）

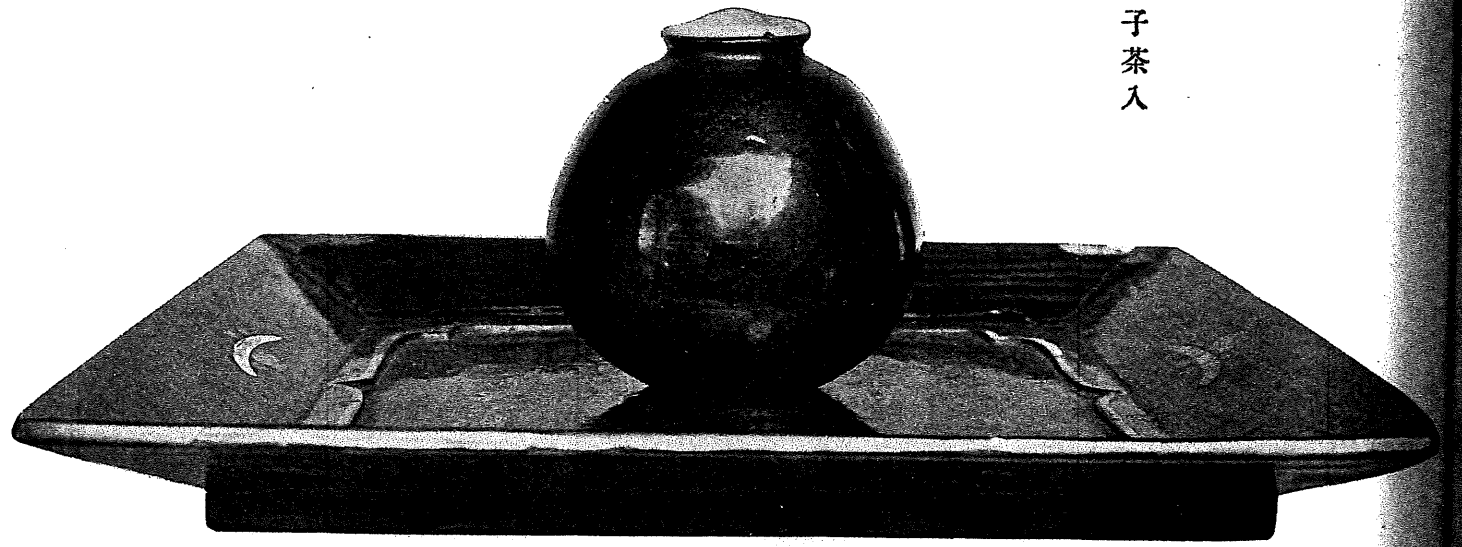
名物。瀬作唐物。茄子。種子島左近家が所持したところからこの名がある。高二寸二分（6.7cm）、胴径二寸三分（7.0cm）、口径八分（2.4cm）、底径九分（2.7cm）～一寸（3.0cm）、額高一分五厘（0.5cm）、重量十九匁五分（73.1g）。口作は丸く、捻返しが浅く、胴に沈筋一線が廻り、裾以下は鉄気色の土見、底近くに一匁廻り、底はやや荒い糸切で、底面にヒツツキ、指頭形がある。総体に天目釉のような浅黄色を含んだ黒釉色で、胴紐上より裾まで釉なだれがあり、露先に蛇蝎色が現れている。西南戦争で火に遭ったといわれ、釉力セがある。伝来は、種子島左近家～島津家。仕覆は、御納戸地雲龍大模様、紺地唐草緞子。蓋一枚。袋箱、二つ 桐白木。扱家、黒塗、書付島津斎宣筆。内箱、桐白木。外箱、黒塗。添盆、青貝盆 金井盆。添盆書付、二通。添盆書付、一通。



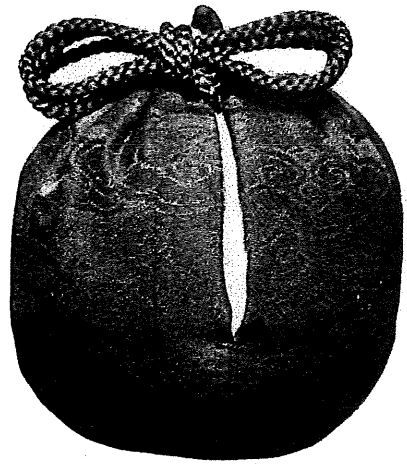
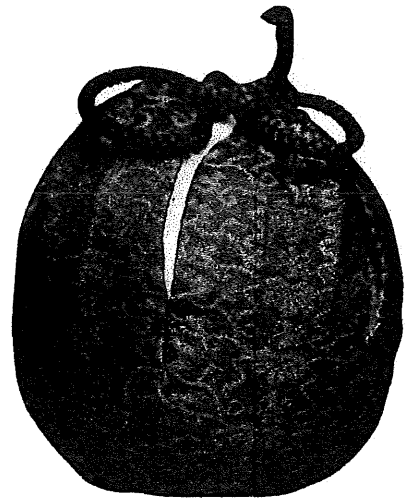
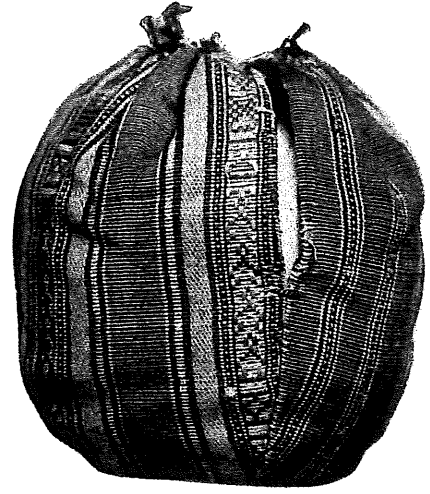
唐物種子茄子茶入

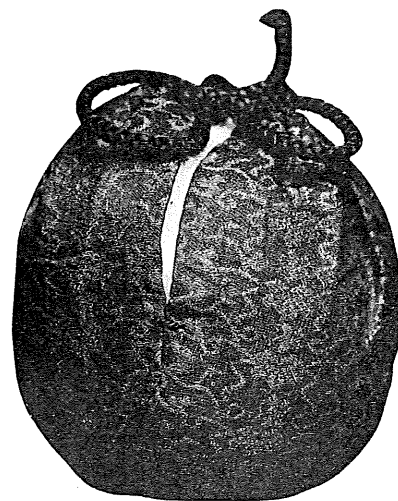
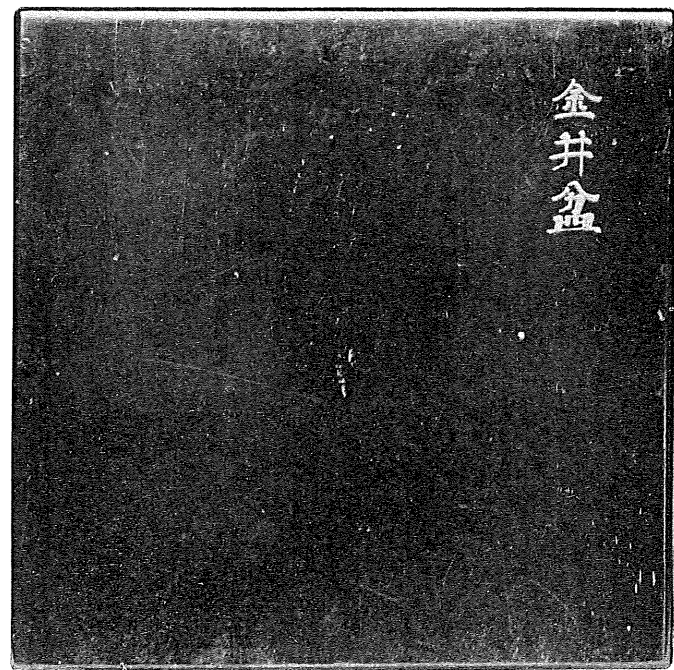
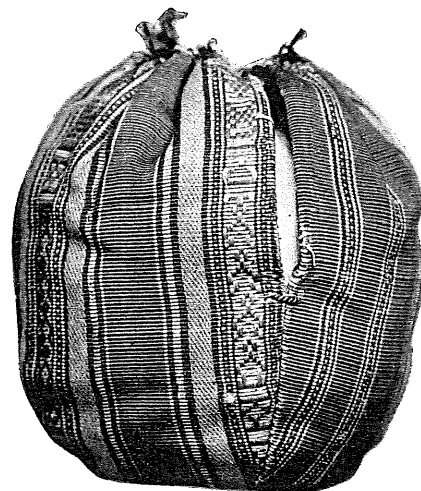
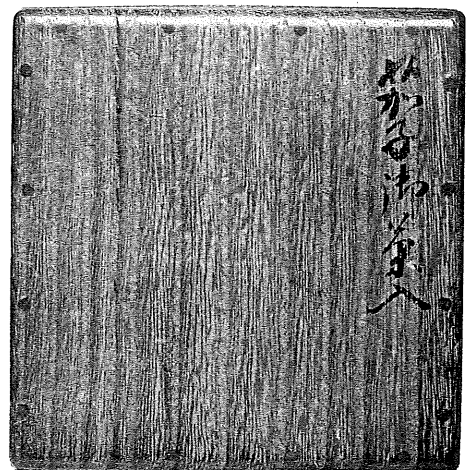


二七 唐物種子茄子茶入



雲龍純子 挽家齊宜公  
綺漢東 金井益添  
袋よきや純子 箱書遠州







昭和三年五月二十八日

# 公爵島津家藏品落札高値表

東京市芝區愛宕下町 於東京美術俱樂部

東京大

番號	品名	高値	番號	品名	高値	番號	品名	高値
一	李廼瓜	金三萬八千九百圓	二七	利休茶傳卷	金六千一百十圓	二五	切子長角鉢	
二	李廼海老	金千五百圓	二八	會我物語	三卷 金九百三十九圓	二六	俱利印筆筒	
三	檀芝瑞竹石	金七百八十圓	二九	爲世和漢朗詠集	二卷 金八百九十三圓	二八	梶川作五十三次繪揃	
四	李安忠鷄頭	金七百三十九圓	三〇	後水尾院金泥普門品卷	金二百三十九圓	二九	梨子地澤鴻詩繪手箱	
五	李安忠鷄頭	金五百三十九圓	三一	大江山繪卷	三卷 金六百五十五圓	三〇	象牙花蝶詩繪紙臺	
六	蛇足伯牙	金二千三百圓	三二	石州記錄卷	金二千三百九十九圓	三一	黑地山水詩繪紙臺	
七	相阿彌雨山水	金六百九十圓	三三	東海道五十三次繪卷	七卷 金四千四百二十三圓	三二	松鶴詩繪硯箱	
八	相阿彌真山水	金一萬六千九百八十九圓	三四	探幽、尙信、安信卷	三卷 金千五百一十圓	三三	黑地羽紅葉詩繪納戶硯	
九	相阿彌漁舟山水	金二千九百八十八圓	三五	探幽、元、百人一首	金五百六十九圓	三四	青貝入人物詩繪小筆筒	
一〇	宗文山水	金三百二十九圓	三六	探幽、金地、西王母六枚折屏風	一、金八千八百八十圓	三五	梨子地松竹梅詩繪提重	
一一	宗文山水	金二千九百八十八圓	三七	山樂、柳橋六枚折屏風	一、金六千三百三十圓	三六	紫檀組机	
一二	宗文山水	金二千九百八十八圓	三八	應文、藤花遊鯉二枚折	半、金六千九百八十八圓	三七	梨子地御紋唐草詩繪文	
一三	宗文山水	金八千九百圓	三九	光起、金地、大内繪六枚折屏風	一、金三千五百九十一圓	三八	赤地雲鶴竹詩繪小筆筒	
一四	宗文山水	金四萬五千五百八十八圓	四〇	晴川院、金地、仙二枚折	一、金五百三十九圓	三九	黑地梅詩繪小筆筒	
一五	宗文山水	金一萬二千五百圓	四一	應舉、金地、松鶴六枚折屏風	一、金四萬六千八百圓	四〇	青磁水屋瓶	
一六	宗文山水	金七千二百二十圓	四二	大名物松屋肩衝茶入	金十二萬九千圓	四一	紫檀高臺寺詩繪爐椽	
一七	宗文山水	金二千七百六十圓	四三	大名物朱衣肩衝茶入	金二萬七千三百圓	四二	銀四君子彫花瓶 一對	
一八	宗文山水	金九百三十圓	四四	漢寶珠茶入	金一萬五千九百圓	四三	仙巖燒古銅式瓶掛	
一九	宗文山水	金二千八百八十圓	四五	唐物種子茄子茶入	金千八百八十九圓	四四	仙巖燒秋草繪火鉢 外	
二〇	宗文山水	金二千九百三十圓	四六	名物高取大海茶入	金一萬圓	四五	古銅雲彫釣燈籠	
二一	宗文山水	金二千九百三十圓	四七	名物若狹盆	金七千八百五十圓	四六	七寶對花入	
二二	宗文山水	金二千九百三十圓	四八	飛鳥川手茶入	金三千九百九十圓	四七	銀鷄置物	
二三	宗文山水	金二千九百三十圓	四九	瀨戶肩衝茶入	金二千九百九十圓	四八	銅耳付花入 外	
二四	宗文山水	金二千九百三十圓	五〇	瀨戶海鼠手茶入	金二千三百九十九圓	四九	白銅手爐 一對	
二五	宗文山水	金二千九百三十圓	五一	瀨戶茶入	金二千三百九十九圓	五〇	仙巖燒花丸植木鉢	
二六	宗文山水	金二千九百三十圓	五二	盛阿彌棗	金八百八十九圓	五一	元祿大判一枚	
二七	宗文山水	金二千九百三十圓	五三	建盞天目	金三千三百三十九圓	五二	享保大判六枚	
二八	宗文山水	金二千九百三十圓	五四	井戸茶碗	金千六百九十圓	五三	眞文小判外	
二九	宗文山水	金二千九百三十圓	五五	井戸脇茶碗	金三千六百八十圓	五四	新二分金外	
三〇	宗文山水	金二千九百三十圓	五六	井戸茶碗	金六百九十三圓	五五	金更紗胴亂 外	
三一	宗文山水	金二千九百三十圓	五七	長次郎黑茶碗	金四百三十圓	五六	濱野直經作金地金物入	
三二	宗文山水	金二千九百三十圓	五八	長次郎黑茶碗	金二千二百三十圓	五七	原國安作七寶寶蓋	
三三	宗文山水	金二千九百三十圓	五九	志野茶碗	金三萬三千三百九十圓	五八	赤銅雲龍透彫印籠	
三四	宗文山水	金二千九百三十圓	六〇	黃瀬戸茶碗	金二百九圓	五九	梶川作山水詩繪印籠 外	
三五	宗文山水	金二千九百三十圓	六一	長次郎黑茶碗	金五百三十八圓	六〇	茶地唐花金更紗 三百八十	
三六	宗文山水	金二千九百三十圓	六二	薩摩四方茶碗	金二千八百九十圓	六一	白地唐草金更紗 二百二十五	
三七	宗文山水	金二千九百三十圓	六三	薩摩秋草茶碗	金千六百九十一圓	六二	白地桐模秋草模樣 衣裳裂	
三八	宗文山水	金二千九百三十圓	六四	薩摩筋草茶碗	金千六百九十一圓	六三	白地桐模秋草模樣 衣裳裂	
三九	宗文山水	金二千九百三十圓	六五	宗哲高臺寺棗	金千一百一十一圓	六四	御所車模樣衣裳裂 外	
四〇	宗文山水	金二千九百三十圓	六六	薩摩肩衝茶入	金六百五十九圓	六五	御所車模樣衣裳裂 外	
四一	宗文山水	金二千九百三十圓	六七	保全金襴手筒茶碗	金二千九百九十一圓	六六	御所車模樣衣裳裂 外	
四二	宗文山水	金二千九百三十圓	六八	道八黑七寶筒茶碗	金八千三百九十八圓	六七	御所車模樣衣裳裂 外	
四三	宗文山水	金二千九百三十圓	六九	古銅桃底花入	金四千三百圓	六八	御所車模樣衣裳裂 外	
四四	宗文山水	金二千九百三十圓	七〇	利休竹花入	金四千三百圓	六九	御所車模樣衣裳裂 外	
四五	宗文山水	金二千九百三十圓	七一	宋胡錄柿香合	金四千九百九十圓	七〇	御所車模樣衣裳裂 外	
四六	宗文山水	金二千九百三十圓	七二	堆朱寶珠香合	金六千二百三十三圓	七一	御所車模樣衣裳裂 外	
四七	宗文山水	金二千九百三十圓	七三	利休共筒茶杓	金三百九十三圓	七二	御所車模樣衣裳裂 外	
四八	宗文山水	金二千九百三十圓	七四	石州共筒茶杓	金二萬三百圓	七三	御所車模樣衣裳裂 外	
四九	宗文山水	金二千九百三十圓	七五	隨流共筒茶杓	金六百六十六圓	七四	御所車模樣衣裳裂 外	
五〇	宗文山水	金二千九百三十圓	七六	仁清牡丹唐草香爐	金二千五百八十圓	七五	御所車模樣衣裳裂 外	
五一	宗文山水	金二千九百三十圓	七七	石州共筒茶杓	金五百八十九圓	七六	御所車模樣衣裳裂 外	
五二	宗文山水	金二千九百三十圓	七八	南蠻繩簾水指	金五千九百八十八圓	七七	御所車模樣衣裳裂 外	
五三	宗文山水	金二千九百三十圓	七九	末切水指	金八百八十九圓	七八	御所車模樣衣裳裂 外	